

生き方の
定義

再び状況へ

大江健三郎

岩波書店

生き方
定義

大江健三郎

び状況へ

岩波書店

生き方の定義——再び状況へ

一九八五年二月二八日 第一刷発行 ©
一九八五年三月二〇日 第二刷発行

定価一四〇〇円

著 者 大 江 健 三 郎
おお え けん ざぶ ろう

発 行 者 緑 川 亨
りく かわ へい

発 行 所 千 101 東 京 都 千 代 田 区 一 ツ 橋 二 五 五
株式 会社 岩 波 書 店
電話 〇三 一 六 五 一 四 二 一

振 替 東 京 六 一 六 三 四 〇

印刷・法令印刷 製本・松岳社

落丁本・乱丁本はお取替いたします

Printed in Japan
ISBN4-00-000113-2

目次

1	「優しさ」の定義……………1
2	「考えられないこと」を下準備する……………21
3	乱世の堇、カキツバタ……………41
4	百年の「迷路」と「新時代」……………61
5	資産としての悲しみ……………81
6	破壊していい最後のもの……………101
7	教育される能力……………121
8	「ある楽しさ」とその反対……………139

9	恐怖と希望……………	159
10	多面的に読む……………	179
11	戦闘的なユマニスム……………	199
12	「この項づく」……………	219

装幀(カバー・表紙・扉) 11 万籐寛

1 「優しさ」の定義

僕はいま世田谷区の市民大学で話す準備をしています。主催者側からもとめられた主題は、三年前、小樽で開かれた全道肢体不自由児者福祉大会で話した続きのつもりで話してもらいたい、ということでした。さきの講演の記録は、『『優しさ』を不可能にするものと闘うために』として刊行しています。そこで当の文章を読みかえし、その展開として考えをすすめることにしました。（『核の大火と「人間」の声』岩波書店刊）

サブ・タイトルが「障害児と私」であったことが端的に示しているように、僕は障害児を家庭に持つ父母の方たちを前に、誕生時に頭部に欠損^{ディフェクト}をそなえていた自分の息子との、共生の経験を話したのです。それも世界規模の破壊を目前にしているような核脅威の時代に障害児と共生する、ということが、僕の問題の把握の根柢にありました。

いま核状況は、さらに深刻さの度合いを加えました。それは世界の今日と明日という視野で日

常を見る者なら、誰もが認めざるをえぬことでしょう。それにつないで個の家庭をふりかえれば——つまり大いなる核の脅威のもとの一市民たる自分の家庭を考えれば——やはり日々の問題として、障害をせおった息子の成長はあり、発育に複雑にからみあっている新しい困難の出現と、その乗り越えということがあります。したがって僕にも、さきの講演の続きという思いは、むしろ自然に湧き起るのです。

続き、ということでもいつも胸うちには浮ぶ言葉として、中野重治が戦後はじめて書いた小説『五勺の酒』の一節があります。《何から書いていいか、書いても書きつくせぬ、話しても話しきれぬといった具合だ。しまいのところへ「この項づく」と入れるつもりだが、忘れてぬかしてもそのつもりで読んでほしい。僕は「この項づく」として話しはじめるのですが、「この項づく」として話し終ることになるだろうとも思うのです。》

息子はこの三月、青島養護学校の高等部を卒業します。これで学校と名のつくところとの縁は切れるわけです。かれは身長、体重ともに父親を越える大男なのですが、同級にもっと大男の友達がいて、それぞれことなる障害を持ちながら、お互いに体調が悪い時、周囲の騒がしさに押しひしがれそうだったり、体内からの不安な徴候に吞みこまれそうだったりするのを我慢するため、片手を握り合ってじっと坐っていると、連絡帳に書いてあったことがあります。その友人とも別れることになるし、再び同じような友人に出会うことは、おそらく息子にはないでしょう。

1 「優しさ」の定義

昨年の秋、かれは卒業後は始める区の福祉作業の訓練に、母親につきそわれバスで通っていました。たまたま僕はカリフォルニア大学バークレイ校に滞在しており、息子は親が片方いないための情動不安定を経験してもいたのでした。加えて作業所での緊張ということがあったでしょう、朝、作業所へ向うバスが交通渋滞にあたりすると、粗暴な言葉と身ぶりで母親を当惑させる、ということが重なるようになりました。

そこで僕は国際電話をつうじ、幾日もつづけてかれと話合ったのです。息子は深く鬱屈しているのがあきらかで、はかばかしい応答をするものではありませんでしたが。そのうち作業所は止めて学校へ戻ったのに、通学の際、駅の階段を昇る途中で発作を起し唇を切る、あるいはそこで踊り場にしゃがみ込んでいる所を、知人から家へ通報してもらう、というような事故も起りました。

それらの事情みなを文章の背後に、文学の用語でいうなら動機づけとしてはらんでいる、息子の手紙がバークレイの宿舎に届いたのです。手紙の後半は文脈が混乱して、父親の僕にも意味が読みとれなかったのですが、前半の文章は、最初の一行が、国際電話での僕の強い言葉を叱責と受けとめての、かれとしての釈明であるのをはじめ、現に内部にあることをよく表現していて、僕は息子の新しい側面を見る印象をいだいたのです。《誠におそれいました。口がいたくなつたあと、かいだんをおりるとちゅう、発作が出て、うなっていました。『ぼくは、もう、だめだ、20年も生きちゃ困る。』》

息子の新しい側面を見る、と余裕のあるいい方をしましたが、正直に言えば、僕の方も息子と離れて外国でひとり暮している、情動の不安定はあるのであり、アメリカの核ミサイルの西独配備をきっかけに、ジュネーヴの核軍縮の会議からソヴィエトが退場して、世界の核状況に悪しき転換点が生まれた時期だったこともあり、やはり鬱屈せぬわけではなかったのです。自分らは親として、息子がともかく二十歳の誕生日をむかえたことを喜んだのだが——とくに妻は喜び、誕生日から時をおかず行われた参議院選挙には、いそいそと息子を投票につれてゆき、「棄権させるようだったら、これまで育ててきた甲斐がない」といって、彼女のこれも新しい側面を発見するような気持に僕をしたのですが——当の息子には、二十年の一日一日を生きたのが障害の困難に耐えながらのことだったのであって、それは端的に苦しい生だったはずだ、かれが弱音ををはかぬため、われわれはその側から考えることはなかったけれど、という思いを僕はいだいたでした。

そのようにして、当節の言葉を用いるなら、落ち込んでいた僕にとって、たまたま読みつづけていたミルチャ・エリアーデの一九五七年から一九六九年にいたる、われわれとも共有した同時代の日記をまとめた本が、励ましをあたえてくれたのでした。("No Souvenirs")
(Harper & Row)

もとよりエリアーデほどの多様性にみちた、巨大な精神世界を持つ学者・芸術家の日記が、単一な方向性のものだということはありません。はじめのうち核兵器による現代の危機について

のエリアーデの考察に出会うたび、僕はむしろ暗くシニクないろあいを感じとるようであったのです。

一九五九年の暮、エリアーデはシカゴ大学の学生から原爆について訊ねられた答えとして、こう記述しています。《キリスト教徒は、この爆弾をあまりに恐れるべきではないだろう。世界の終りには意味があるのであるから。それは「最後の審判」なのであるから。ヒンズー教徒についても同様であろう。「カーリ・ユーガ」界は混沌への退行のうちに終り、その後、新しい世界があらわれよう。ただマルクス主義者たちのみが、窮極の結果たるべき核による終末によって、恐怖させられる正当な理由がある。というのは、かれらにとってパラダイスは未来に属するからだ。パラダイスはかつて地上に存在したことがない。それに対応する、もっとも近似的なものは、明日の、階級なき社会である。マルクス主義者は、ただ未来がパラダイスのごとくであろうというこのみで、数知れぬ殺戮を——自分の身の上にと——受け入れるのである。もし世界が共產主義の終末世界を知りうる前に消滅してしまうならば、すべての歴史と人類のすべての苦難は、まったくいかなる意味も持たぬであろう。》

僕はエリアーデの比較宗教史の分析を尊重しながらも、マルクス主義者の今日の考え方・役割については、また別の感想を持っており、したがってその部分を中心に、エリアーデの言葉には、ある突き放したシニシズムとでもいうものを感じたのでした。しかしエリアーデが、真正面から

核兵器による人類の終末について見すえ、考えつづけている人間であることには疑いようがないのです。翌年一月の項には、次の記述が見られます。

「マルクス主義者と唯物論者の歴史の解釈が、人間の「最後の審判」にあったことはいいえよう。審判、すなわち滅亡の危険。正確に、先史期において人類がほとんど滅亡しかけたように。あるいは今日、熱核兵器によって、人類が滅亡を賭けているように。／唯物論者のように、あるいはマルクス主義者のように考えることは、人間の原初の神にあたえられた役割について断念することを意味する。その結果、人間として消滅してしまうことを。しかしこの誘惑とその危険とが存在することは、むだではあるまい。人間としての火急に迫った消滅の自覚とともに生きることが、人間にとって良いことですらある。怖れⅡイニシエイション的な苦しみ。」

イニシエイション、新しい段階に入る儀礼的な手つづきは、エリアーデが人類規模の普遍的な信仰体系を考えてゆく、肝要な問題点のひとつですから、かれが核状況にシニクな傍観者として対するのではないことは、あきらかに読みとれます。しかしそれを超えてさらに、核爆発による人類の滅亡という考えとは対極をなす、積極的な希望へのヴィジョンとして、エリアーデはなにを構想しているのかを、僕は知りたいとねがっていました。そのうち表面にはつきり書くのではありませんが、エリアーデがひそかに、しかし確実に、当の思想を提示しようとしているのが、

おなじ日記の次のような記述だと、僕は読みとっていったのです。そしてそれによって、さきに行った落ち込んでいる自分を癒されるようであったのです。

一九六一年はじめ、エリアーデはブカレストでの少年時代における、またインドでの激しい学習期、ポルトガルでの文化アタシエの仕事、そして終戦につづく母国ルーマニアの社会主義体制化を契機に、パリで亡命者としてはじめた学究生活の、経験のすべてが統合され、「より大きく」「より円く」なるのを見るように感じます。これまでは経験の深みのわずかなところにしか到達できなかったのが、深みの最深部まで全体を見とおしえた、という思いをいただきます。自己の生の「ひろがり、持続」について啓示にみたされたのです。かれはそれを描く記述を、次のようにしめくくっています。それはこの日までいかに永い間、エリアーデが鬱屈をあげわってきたのだ、ということの意味するでしょう。当の鬱屈のよってきたるところには、核状況への認識もおおいに力を加えていたはずだと、僕は思います。

エリアーデがいまも構内に住んでいるシカゴ大学には——僕も今度をはじめて直接に見て、強い印象を受けたのですが——はじめて核エネルギーが解放された場所を記念するヘンリー・ムーアの壮大な彫刻があります。原爆の広島・長崎への投下もまた、おなじ言葉という言葉で表現される、という経済史家内田義彦氏の指摘を思いつつ、僕は核時代の悲惨な記念碑、原爆ドームをそこに併置するさまを考えましたのですが。ともかくも、エリアーデの記述はこうでした。

《活気にみちた、強い感情。歴史に生き死にする人間生活が、急に意味を持ち、重みをそなえてくる。オブティミズム。》

この啓示の経験の直後、エリアーデは、青年時に読んだバーベリオンの日記を再読して、そこに書きつけられている、ソラス著『古代の狩人』を読んでの感想に、深い印象を受けたことを長く記述します。エリアーデが強調するのは、ソラスを読むバーベリオンが、悲惨と病いの現実をなぐさめるものとして、旧石器期の人間の生き方から力をえたこと、それはかれの生の「破壊されえぬこと」を確信させる「顕現」であつたのだ、ということでした。エリアーデはいうので

《彼は書く。——それというのはなにものも、「私が生きた」という事実をあらためることはできないからだ。たとえいかに短い時にしても「私は存在した」。それは本当に、私が顕現としての人間存在の破壊されえぬことと呼びたいところのものだ。しかしB（バーベリオン）はつけ加える。——そして私が死ぬる際、私の肉体を構成する物質は、破壊されえぬ、かつは永遠である。そうであれば、私の「魂」になにが起ろうとも、私の物質はつねにありつづけるのだ……私が死ぬる際、あなたは私を殺し、焼き、沈め、散らばしてしまうことができ

る。しかしあなたは私を破壊することはできぬ……死はもはや殺すより以上のことはなしであつたのだ。Bはこのように書いたが、それはかれが博物学者であつたからだ。しかし私は

数知れぬ「神秘家たち」がほとんどおなじ言葉で、似かよった経験をつたえるのを見て来た。
(cf. とくに「宇宙意識」の経験。)

キリスト教徒とヒンズー教徒の、世界の終末へ余裕を持ちうる態度と、マルクス主義者の、歴史的過程が完成せねばすべて無意味な、切迫した態度をめぐり、エリアーデは人類滅亡の可能性について距離をおいた、相対的な見方を示していたのでした。しかしここでエリアーデは、博物学者バーベリオンの考え方を、かれ自身のもっとも親近する「神秘家たち」の思想に、とくにその「宇宙意識」にかさねています。その上で人間存在の「破壊されえぬこと」の「顕現」として熱い共感を示すのです。それを核時代に生きるエリアーデの、内なる希求の表明としてとらえることは、むしろ自然でしょう。人間存在の「破壊されえぬこと」の「顕現」へ向けて、現代人の思念が強化され増大することによって、ついに核状況の危機を乗りこえることができるならば、エリアーデもそれがキリスト教徒やヒンズー教徒にとつての「最後の審判」や、混沌を経ての再生の到来を遅延させるものとはいわぬでしょう。むしろ今日の核状況、熱核戦争による人類の滅亡の危機という混沌を乗りこえることにこそ、かれの再生への思想は方向づけられていると、エリアーデ著作の様ざまな細部に、核危機へのコメントが行われるのを見てきた僕は、そう主張する根拠を持つのです。

エリアーデの日記のこの一節に、僕が直接励まされたのには、はじめにのべた障害のある息子

につながる理由もありました。この一節によって、あらためて自分の個としての生の経験の意味が教示されたと思つたのです。エリアーデの言葉を用いて当の経験をいうならば、二十年前はじめての子供が、後頭部にもうひとつの頭のような瘤をつけて誕生した際、僕は妻とともにこの子供をよく引き受けて、困難があるにはちがいないが共生してゆこう、と決意しました。それはエリアーデのいうとおりに、人間存在の「破壊されえぬこと」の「顕現」を見ることをつうじての決意でした。

思いだしてみれば、特児室のガラス窓の向うに横たわり、二つの頭を持っているように見えながら、元氣そうな真赤な顔をして生きつづける息子について、毎日かれを覗きに行くうちに、このような考えが育ってきたのでした。学生の頃読んだイギリスの小説から、「この哀れな小さな生きもの」という言葉がいつもよみがえってきたのも思い出します。この赤んぼうはまことに悲惨な状態で誕生し、数週間を生き延びてきているのみだが、かれが生きている、存在している、という事実は誰も取り消すことができない。神があるとして、いかなる神にもそれはできない、と僕は深く感じとるようであったのです。そこで僕は「この哀れな小さな生きもの」について、かれが生きた、かれが存在した、ということの証人になろう、すなわちこの子供をよく引き受けて共生することにしよう、と決意したのでした。しかも当の証言が、自分の生涯の文学ともなるにちがいない、と予感もしたのです。もっともそれは、この経験を小説に書こう、というふうに

考えたのではなく、若い学生としてはじめて小説の仕事が、子供の畸形の誕生という出来事の前に絶望しかねない自分、その建てなおしのために役に立たぬ、自分が生き延びる手がかりにならぬ、という苦い自覚に面とむかっていたことからの思いでした。

障害とともにある子供の出生の年から、僕は広島の被爆者たちの死と生にかさね、かれらと共に生し・共闘する医師たちの行動と思想について——みずから被爆しつつ、被爆者治療のそもそもの第一歩をはじめ、以後も原爆病院院長として白血病や被爆二世の課題にとりくみつつけられた、重藤文夫博士を核心に——ルポルタージュを書くこともはじめました。それは障害児である息子との共生という、個としての決意および実践を、なんとか社会化するための手つづきであったと、仕事をつづけているうちに納得されたのです。被爆者たちが、そのように生きている・生きた、存在している・存在した、ということは、かれらの個の生について、なにもものも取り消しがたい事実であり、同時に核時代における人類の生の、取り消しえぬ現状に直接照明をあたえるものです。被爆者たちの生と死に、人間存在の「破壊されえぬこと」の「顕現」^{インディストラクティブ・エビデンス}の、もつとも現代的なあらわれを見る、そしてそれを障害児との共生をつうじて自分が発見してゆくものに重ねたい。そのように僕は、当時充分に意識化しているとはいいいがたいのであったけれど、心の奥底でねがっていたのです。

いま僕は二十年前に予感し、希求したことはまちがっていなかったと——それを無邪気に誇る

というのではなく、様々な痛恨の思いもからめて考えています。障害を持っており、それに抗って成長すること自体が、新しい困難を呼びこまずにはいぬのであり、短い将来のことを考えるだけでも、お先真暗なところがあると正直にいわざるをえぬ、つまりは具体的な困難があらわれるたびにそれと取り組む、という仕方でいちいち克服してゆく、これまでの態度を続けるほかにない息子との共生は、母親および妹や弟にとっても、あきらかに苦しい作業であったのだし、あらためて気がついてみると、息子が手紙でいうとおりに、かれ自身にとってもっとも苦しい経験だったのだした。「ぼくは、もう、だめだ。20年も生きちゃ困る。」しかし父親である僕はもとより家族みな、やはりかれとの共生をつうじて、人間存在の「破壊されえぬこと」の「顕現」を見てきたのも確かなのです。それを僕はとくに、かれの弟と妹の育ちぶりの実際に立って、はつきりいいうるように思います。

そしてそのように個としての人間存在の「破壊されえぬこと」の「顕現」を見る経験をかさねてきたからこそ、この二十年間の凶々しいものになりまざる核状況について——今年から『ビュレティン・オブ・ジ・アトミック・サイエンティスト』誌の「審判の日の到来を示す時計」は、核戦争三分前を示しています——しかもなお人間の、再生をもとめる意志が危機にうち克つはずだという、エリアーデの用いる意味での「オブティミズム」をいだきつづけていると考えるのです。もとよりこの「オブティミズム」は、われわれ市民にとって、核状況の凝視とそれを世界